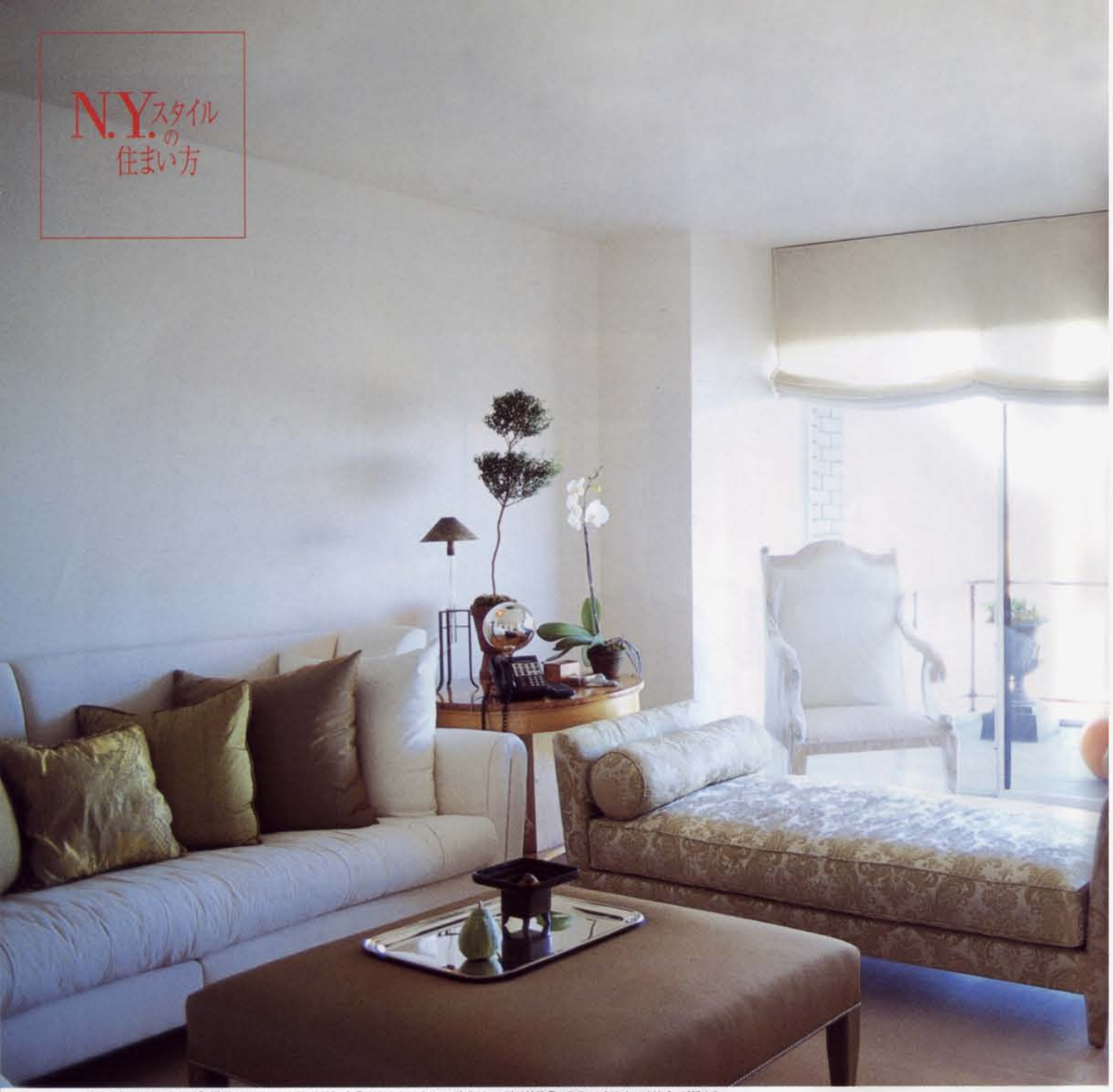
N.Y.スタイルの住まい方

抜群の眺望、ニューヨークならではのコンドミニアム

Steve Fabrikant

スティーブ・ファブリカント

スティーブ・ファブリカント。リビングの一角に置かれたデスクにて。



リビングルーム。スティーブが集めたアンティークもの以外、家具はすべてインテリア・デザイナーによる特注品。テラスからはイーストリバーが望める。

PROFILE

1953年、父親の駐在先だったブラジル、リオ・デ・ジャネイロで生まれる。67年一家でニューヨークへ。76年父親のアパレル会社を継ぐ。83年独立以後はファッション・デザイナーとして活躍、現在にいたる。

取材の時期はちょうどハロウィン、ハロウィンのかぼちゃも大切なインテリアのひとつ。

スティーブ・ファブリカントは、大学では建築を専攻しましたが、父親が興したアパレル事業を引き継いで、現在はファッション・デザイナーとして活躍中という、一風変わったキャリアの持主。彼が得意とする婦人用ニットは、エレガントとカジュアルの融合を特徴としており、今日本でも注目を集めつつあります。

そのスティーブが、妻、一人娘とともに暮らすコンドミニアムは、マンハッタンのミッドタウンにあります。それは、西側にエンパイアステートビルを望み、東側のテラスからはイーストリバーを見下ろせる総戸数360戸の高層の高級集合住宅です。スティーブは、この物件を一年半かけて探したということですが、購入を決定する際に最も大きなポイントとなったのは、ゆとりの空間とサービスの充実でした。たとえば、マンハッタンでは戦前のビルに人気が集まりがちですが、それは、戦後に建ったビルの一般的な天井高が8フィート（2・44m）であるのに対して、戦前築のビルは通常9フィート（2・74m）とゆったりしているためです。スティーブが見つけたこの物件は、戦後（1974）の建築にもかかわらず天井高が9フィートあり、床面積も325㎡とスペースに充分なゆとりがありました。サービス面でも、ドアマンは24時間常駐しており、コンドミニアムを管理・運営するスタッフも充実しています。配達の受渡し等はもちろんのこと、ロビーから玄関までの荷物の持ち運び、ガレージからの車の移動など、

オフィスにて、スタッフとの打ち合わせ風景。

N.Y.スタイルの住まい方

ゲスト用のパウダールーム。蛇口に至るまで、すべてがオリジナル。

ダイニングルーム。アンティークの椅子にスティーブのこだわりが伺える。

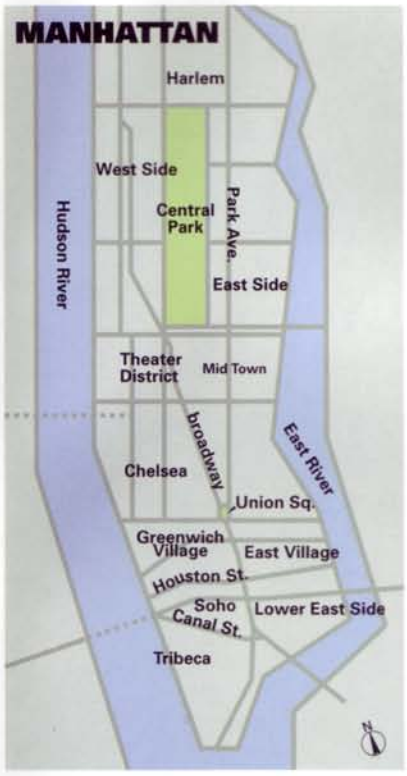
主寝室。ベッドの位置で奥様と意見が分かれたが、横になったときイーストリバーが見えるスティーブの案が採用された。

申し分ありません。また、2戸あたりに一基のエレベータで、自分の住まいまで、長い廊下を歩く必要がないことも魅力の一つでした。

ファッションに転向したとはいえ、スティーブの建築に対する関心は今なお強く、自分のプティックのインテリアデザインも自ら手掛けるほどです。この自邸も、大学時代の友人を介して知り合ったインテリア・デザイナー、ベンジャミン・ノリエガ・オーティスに改装を依頼していますが、家具、小物など、全体の雰囲気を形成する部分では、ほとんどベンジャミンとの共作といえるほど、積極的にデザインに参加しています。

さて、ファブリカント一家は、サウスハンプトンにウィークエンドハウスを所有していますが、頻繁に使用するのは夏期だけで、冬はほとんどこのマンハッタンの自邸で過ごすといいます。それは、冬季には美術展、演劇、音楽会など、様々な文化的イベントが開催され、退屈することがないからです。ニューヨークに住む魅力とは、スティーブの言葉を借りると「銀行に豊富な預金がある状況」に例えられるといいます。つまり、この街には数多くの文化、娯楽施設、あるいは公園があり、常に各種のイベントが開催されていて、思い立ったとき好きなものを選んで楽しむことができる。スティーブは、これこそがニューヨークに暮らす醍醐味なのだといいます。

リビングルーム。フローリングはこの住居専用にカットされたカエデ材。



ニューヨーカーの暮らし方、最前線

ニューヨーク、マンハッタン（語源は、先住インディアンの言葉Mana-Hatta「速い潮ときらめく水に囲まれた」）は、初めてこの島に移植したオランダ人たちによって、1811年、南北に走る12本のアヴェニューと東西に走る155本のストリートが作られ、街づくりがスタートします。すでにこのとき、現在のマンハッタンの設計図が描かれていたといってもいいでしょう。その後19世紀末から始まる建設ラッシュによって、街の景観が次々に作られていきますが、それぞれの地区で発展したビジネス、あるいは住み着いた人々によって、街の性格が形成されました。

たとえば、マンハッタンのほぼ中央にあたるミッドタウンは、オフィスビルがたち並ぶビジネス街になり、グリニッチ・ビレッジは、1920年頃からアーティストが好んで住み始め、画廊やアトリエ、カフェが多い地区として発展しました。また、ハウストン通りから南（South of Houston）ということから付けられたニックネームで知られるソーホー地区は、かつての倉庫街にギャラリーやショップ、レストランがオープンして街並みが生まれ変わったエリアです。最近ではこうした動きがさらに南下し、デザイナーやカメラマンといったクリエイターたちが好んで移り住みつつあるトライベッカ地区（Triagle Below Canal、キャナル通りより南の三角地帯）が注目を集めています。

住宅街としては、セントラルパークを挟んで東側のアッパー・イースト・サイド、西側のアッパー・ウエスト・サイド（ジョン・レノンが住んでいたダコタアパートがある）が、いわゆる高級住宅地として有名です。こうした各地区の特徴は、時代の変化を受入れながら発展し、形成されました。成長を続けながら、変貌する都市という巨大な生物がニューヨークなのです。

トランプ・インターナショナル・ホテル&タワーからセントラルパークを望む。

不動産ブームが支える住宅の高級化志向

そのニューヨークの不動産は現在、アメリカはもとより、世界の注目を集めています。マンハッタン全域で賃貸物件の空室率が1%、分譲でも2%といわれるほど完全な売り手市場と化しており、良い物件にあたったら、その場で手付金を払えといわれるほどです。特にダウンタウンのグリニッジ・ヴィレッジ、ソーホー、トライベッカ地区の人気は急上昇。なかでもトライベッカは、カルバン・クライン、ダナ・キャラン、ラルフ・ローレンなどの有名人も物色中ともいわれています。一番人気のパークアヴェニュー沿いでは、ペントハウスで500万ドル（約6億円）という物件も出現しています。また、最近セントラルパークの南西角地という一等地に、ホテルと高級コンドミニアム（分譲マンション）の複合高層ビルがオープンしました。これは、一時窮地に立ちながら奇跡の復活を果たして名を上げた不動産王ドナルド・トランプが、他2社との共同で満を持して完成させた「トランプ・インターナショナル・ホテル&タワー」です。最大の特徴は、コンドミニアムにホテルで通常コンセルジュと言われるサービスを盛り込んだこと。住居に「ホテルの快適なサービスを！」という付加価値が話題となり、このコンドミニアムは、現状では最上階の高額住戸をわずかに残すのみということです。つまり、ニューヨークの一部の人々の高級化志向がさらに進んだといってもいいでしょう。

インテリア・デザイナー、ベンジャミン・ノリエガ・オーティス。

ニューヨーク在住30年の建築家、森トシコさん。

スティーブ・ファブリカントのコンドミニアムのデザインを担当したインテリア・デザイナー、ベンジャミン・ノリエガ・オーティスによると、リフォームに対するこだわりに同様の傾向が見られるそうです。彼らは、自分のイメージした空間が実現できるまで、徹底的にお金をかけて改装を行います。その過程には施主との徹底的な議論がありますが、そうすることによって、施主の中にこれが自分の家なのだという自覚と愛着が